

ッガの所謂「世界」といふやうなものに於て見出さるべきものではなからうか。然しここに世界とはもとより單なる存在者の總體といふやうな存在的概念ではなくして、却て自からを否定し、自からを超え出ることによつて自からを見出す主體の自己解釋の脱自的地平である、世界は物の世界でなくして、世間、即ち有情の世界である、そしてこのやうな存在論的實存論的な世界への超越こそ、實踐的自覺から宗教的自覺への通路を可能ならしめるものである。即ちここに主體が自己を否定し、自己を超え出るといふ場合、この否定は單なる論理的否定ではない、單なる論理的否定は空無を結果し、決してこれに於て眞の自己性を現成し得ない、超越に於て眞の自己性が現成し得るためには、この否定は單なる否定でなくして、それは與へること、即ち施としての否定でなければならぬ、主體が自己を與へ盡すことに於て、そこへ自からを超越しゆく當のものは單なる非我でなくして有情の世界として可能となるのである。かの「無門關」の「香嚴上樹」に於て、口無く、手無く、足無き絶對否定の人は、かの祖師西來の意を問ふ衆生のために絶對悲に轉じ、自から「喪身失命」することによつて、即ち慧が悲に轉ずることによつて、往に對して還を實現することを得るであらう。即ち自己は自からを與へ盡すことによつて眞の自己となり、自覺は自覺をなくすることによつて眞の自覺に達する、そして宗教的自覺とはこのやうな自覺ではないかと思はれる。

(K・A生)

隋唐革命時代の佛教

京大教授 塚本善隆

西曆第六世紀の後半支那には革命が續起した。北周が北齊を亡して(五七八)北支を統一したが間もなく隋に革命せられた(五八一)、隋は陳を亡して(五八九)南北支那を統一したがまた唐に革命せられた(六一八)。この支那語の革命は、いはゆる天命を革める、朝廷がかはることで、歐洲におこつた社會を變革してしまふレボリユーションではないが、朝廷の興亡に伴ふ政策の變化は必然であり、特にこの短い期間の革命連續には宗教政策に大變動が伴つているし、また特に外來でありながら最大の教團となつていた佛教に對する支那思想信仰からの強い抵抗運動がおこつている。宗教に對する政治的強壓や思想的排斥はその宗教を必ずしも衰滅させるものではなく、逆にそれが眞生命を内藏するものならば、自ら内省して形式化した傳統の衣をぬぎすてて宗教本然の使命にたちかへり情熱を盛つて救ひの運動に挺身するに至る契機となるもので、興隆への逆縁とさへなるものである。明治維新の廢佛毀釋は明治後半から大正にかけての佛教興隆を導く恩恵となつたが、今時の占領軍が經濟界、政治界、一般思想界にあれだけの強壓を加へながら宗教界に手をふれることを避けたことは、日本宗教にとつては或は悲しむべき不幸であつたかも知れぬ。さてここでは、支那に於ける外來佛教が上述の短期の革命連續と政治的思想的強壓を契機として、自ら内省しいかに傳統をぬけて、今ここに、自らの宗教としての情熱的運動を展開するに至つたかを考へて見た

いのである。

北周はすべての宗教教團を國土から一掃する徹底した宗教廢除政策を斷行し、他の宗教からとびぬけて盛大を極めていた佛教の佛像も寺も僧も一舉に壊滅して姿をけしめた。廢除された佛教は如何なる性格のものであつたか。既に漢文になつた佛典に親んだ支那佛教徒は、その原典に遇つて原義を究めることをしなくなつていた。古典尊重の風潮の強い中で、梵語原典をすてて言語文字の性格の全く異つた漢字漢文になつた聖典に對して支那の思惟方法で解釋や註釋を加へて行く、その博識さやざん新さを競ふ講席の盛が佛教界を代表する時代、學派學教——教相判釋を競ふ佛教の時代であつたが、おびただしい聖典を大系化し批判し解釋講述するのに熱心なことは、救ひの問題、成佛の第一義諦を忘れがちになるものである。閻魔王の審判によつて洛陽で最大の學者として最も多くの聽講者を誇つていた曇無最を始めとして、立派な佛像や寺院の造營につとめた僧が地獄に追はれ、ただひたすら誦經や坐禪につとめていた僧のみが天堂に生れたといふ洛陽伽藍記の傳へる話は、正しくこの時代の佛教界の弊をついたまじめな求道者達や大衆の警告でもあり批判でもある。

南北朝時代の佛教徒は漢譯された幾多の佛教を大別して大乘小乘、或は聲聞、緣覺、菩薩の三乘にし、小乘即ち聲聞緣覺の二乘を貶して大乘菩薩の教を以つて歸すべき佛教とした。彼等は二乘小乘は自己のさとりで満足し安住するものとして貶し、大乘菩薩は自利利他の圓滿特に利他、一切衆生を救ひ社會を完成せんことを誓願しこれに不退轉の實踐をするものとした。維

摩居士や勝鬘夫人に見られるように僧俗の區別なく、救ひは平等に與へられるはずであつたが。大乘菩薩を標榜した支那佛教徒はたしてそうであつたか。逆に彼等は自己の救ひに満足し、衆生全體を忘れ、出家者僧にのみ體得せられる佛教を考へ社會に實現すべき大乘佛教の主張を忘れたかの感が深い。支那に於ける佛教は貴族社會が發達する東晉時代に急速に弘まり特に貴族社會に受容せられて時代文化の先頭に立つものとなつた。貴族官僚界の清談、隱逸、嘉遁の好尚が佛教の出家遁世の風と結びつくのは當然であつた。廬山の靜寂境に清集を結んだ慧遠が、強い武力政權に抗し儒教の「禮」の拘束をしりぞけ僧は君主を拜せずと、「方外の賓」をもつて任じた強硬な主張は、宗教者として極めて正しく嚴肅なものであつたが、支那佛教を方外出家者の教とし、社會國民から引き離し、寺に孤立する僧の佛教へと誤らせて行く危険を伴うものでもあつた。支那佛教一千年史の上に、「善ねく平等に救ひを」といふ菩薩の精神に立ち僧俗區別を除いた「普度」の要求や運動(例へば宋末元初の廬山の僧普度の白蓮宗の如き)はしばしばおこつているが、世俗社會から寺と僧を引離す政治家の佛教觀と佛教徒の傳統とに壓せられてすなほにのびることができなかつたのを見るのである。

さて北周はその國號が示すように古の周公の政治へ復るといふ理想を標榜したが、かかる儒教的理想の下では儒教禮典にのせられていない祭祀のすべてが淫祠邪教とし、周公時代になつた外國胡人の佛教の如きも無用とする政治や議論が當然に起り得る。英邁な北周武帝ははじめ禮教祭事に心をよせていた

が、やがて北齊討伐、北支統一に國力をあげる決意をするに及んで、何よりも對立している儒佛道三教、中でもいがみあひのはげしい佛道二教を歸一して國論を統一し、あらゆる人と物とを戦力に總動員し、急速に國をあげて戦力一本に強化する要に迫られた。時に蜀の僧衛元嵩が國中の寺と僧とをすべてを廢せよ。それが佛意に合する大乘菩薩の佛教を興隆する所以であるといふはげしい論策を上つた。曰く堯舜時代は佛教なくして國家安泰であつたが、梁は大ひに佛を奉じ國滅びた。佛心に合せぬからである。佛心は平等慈悲であるのに今の佛教は曲見伽藍に利己の二乗僧を偏安しているにすぎぬ。かかる寺と僧を一掃して一平延大寺に四民を平等に安住せしめよ。平延大寺は國家そのものであり皇帝を如來とし官民を僧とし國利民福を増進すること、ここに大乘菩薩の佛道實現が進められるのであると。武帝は戦争の爲に佛教から戦闘力、労働力となる大きな人的物的資源を一舉に得る政策を辯護し翼賛する論據に僧衛元嵩の提案を用ひて最大の佛教教團を道教並びにすべての民間祠廟と共に廢してしまつた。そして強大な戦力を以て北齊を滅し北周以上に盛大であつた北齊の佛教も廢滅してしまつた。隋の革命まで佛教全盛の北支に突如無佛教の空白状態ができたが、此に注目すべきことは、武帝の佛教廢毀は、現在の支那教團即ち佛意に背き大乘菩薩の道を忘れていた小乗的佛教の否定であつて佛教そのものの否認ではなく、逆に佛の本義の復活を要請し、菩薩の平等一切の救済の精神を高揚していることである。心ある佛教徒が自らの教團のあり方に深く反省せしめられたことは必然である。インドの聖典の解釋學に競つていた佛教界に、現

在、ここ、私の問題への深い内省が起るべきも必然である。經典の末法五濁惡世の説を知識としてではなく、今自らの生きている現實として體認する人々によつて、今、この即ち末法惡世の私共の佛教でなければならぬとの求道の態度が決定せられて新しい信仰實踐が熱情をもつてもり上つてきた。今の私共凡ての救ひの爲に、今の人間の共通性、その具體的眞實が追求して凡夫性と其の罪と惡とを認めざるを得なくなつた。無佛教七年の地から新革命朝廷隋の熱心な佛教再興政策によつて復興した佛教界に末法罪惡凡夫の佛教のみ今の凡てに平等に救ひを與へる菩薩佛教であるとする實踐的新佛教運動を提唱したものが三階教祖信行とその一門——僧俗の信者の一團であつた。隋の佛教興隆政策にのつて復興した佛教の大勢が前代の舊佛教であつたことはいふまでもない。傳統的佛教は三階教の運動を異端とし政治力と結んで彈壓し解散を命じた。しかし今ここに私の佛教への自覺は如何ともすることのできぬものである。末法五濁惡世は最早知識ではなく今この事實として求道者の魂を内面からゆすぶる「深信」へと深められて行つた。唐の革命と共に儒教主義が強く復興し、老子教が特別な地位を得た。二つの支那民族の思想信仰から外來佛教に對して強い反撃が加へられてきた。法琳、道宣などの巨匠が護法の爲に熱烈な論陣をはり政治界に抗議して殉教者とさへなつた。この政界學界ととりくむ學匠の運動と別に同時に、道宣が「山僧」と記している無位の僧善導によつて、山西の道綽から傳へてきた末法五濁惡世の罪惡の凡夫の佛教、彌陀念佛教が大成せられ高揚せられたことは諸氏の十分御承知の所である。三階教は末法凡夫なるが故に

普敬普行の普の實踐に徹底し、道綽、善導は末法凡夫なるが故に一佛への專修念佛行へ徹した。兩者結論に於いて實踐に於いて對蹠的になつたが、學派的教判的佛教の傳統を、今ここに私の問題として抜け、末法惡世凡夫趣惡といふ同じ基底から現在の全人類の救済佛教に挺身したことは同じである。そしてこの新宗教運動は、佛教が世俗的營なみと結びついて全盛を極めた南北朝末に、この教團を眞向から非菩薩佛教、利己的の二乘佛教と否定し去つた僧衛元嵩の爆彈動議と、國家非常時の戦力體勢緊急實現に結びついた武帝の佛教教團廢棄の宣言と嚴峻な實施こそ、その力強い行進開始の重要な契機の一つとなつたと認められるのである。

時間に迫られて後をはしおり、尻切れとんぼ的論述に終つたことを深くおわび申しあげる。

編者識

本誌に、春秋二季の公開講演要旨を掲載することは、單に本學會の動きを知りうるのみではなく、言語に現れた學的内容を識る上にも、すこぶる有意義であると考へる。従つて、今後事情の許す限り繼續する心算である。

また、今回の講演要旨中、世良先生の「自覺の性質について」なる講演の速記は、専ら哲學研究室の阿部氏が當られ、「隨唐革命時代の佛教」は、塚本先生御自身の手を煩せたものである。こゝに附記して謝意を表す。

なほ今春の講師には、今のところ舟橋一哉・壽岳文章の兩氏が豫定せられている。

大谷大學研究年報

第一輯

- 佛教生活と受動性 鈴木大拙
- 教行信證研究序説 稻葉秀賢
- 高麗高仙芝事跡攷 諏訪義讓
- 出身 福井元澄
- 人口の社會形態學的作用と都鄙教團 徳重淺吉
- 古神道の基本的性格 徳重淺吉

第二輯

- 親鸞聖人と涅槃經 安井廣度
- 中觀派に於ける中觀説の綱要書 山口益
- 佛教經典成立史上に於ける華嚴、 西尾京雄
- 如來性起經について 野上俊靜
- 元代道・佛二教の確執 舟橋一哉
- 阿含の實踐道における自覺の問題 舟橋一哉

第四輯

- 感情の本性と無の問題 世良壽男
- 六條の御息所 多屋頼俊
- 草堂詩餘の版本の研究 中田勇次郎
- 西藏譯「解深密經疏」に就いて 野澤靜證
- (頒價、第一・二輯 各二〇〇圓。第四輯 二五〇圓)
- 尙第三輯は賣切)